View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【注釈】

『古本説話集 全注釈』大齋院事（第一）

其の一（五丁オ1～六丁オ7）

Kohonsetsuwashu Zentyusyaku Oosaiinnokoto : I

椎葉 富美
安倍 素子
川浪 玲子
中村 文子
福田 益和
山口 康子

Fumi SHIIBA
Motoko ABE
Reiko KAWANAMI
Fumiko NAKAMURA
Yoshikazu FUKUDA
Yasuko YAMAGUCHI

（1）

要約

『古本説話集』は、編著者未詳、成立は平安末期から鎌倉初期と言われている古写本である。唯一の伝本である旧梅澤記念館蔵鎌倉中期写本（現東京国立博物館所蔵）には、題簽も内題もないため、本来の書名は不明であり、一般に『古本説話集』と呼ばれている。

流麗な平仮名文で、大斎院選子内親王の話に始まり、関寺の牛仏の話で終わる。王朝文学の著名人を中心に樵夫や貧女の話に至るまで有名無名人の逸話や観音霊験譚などが収められている。『今昔物語集』以下の諸説話集との共通説話も多いが、書承関係は明らかになっていない。

本稿は、『古本説話集』の「注釈」を試みるものである。「大齋院事（第一）其の一」として、まず巻頭の「大齋院」の説話から着手し、順次全七十話の「注釈」を試みる予定である。「注釈」に先立って、漢字表記の「目録」について述べ、該当部分の「目録表題」を訓読する。「本文」は、原文に復元できることを目指す一方、読みやすさを考慮し、比較の便のため、「対照説話」を本文の下段に記した。「口語訳」は、平易かつ明確な現代文を心がけ、原文の雰囲気が伝わることを意識した。「語釈・語法」は「注釈」の根拠を示し、特に日本語学的視点を多く取り入れるように心がけた。さらに「補説」として、「注釈」における重点箇所を特記した。今回は、村上天皇の皇女選子内親王、すなわち大斎院の賀茂祭の行列の時の逸話を取り上げ、「其の一」として、冒頭から二十七行分を対象とする。

キーワード　古本説話集・大斎院・賀茂祭

解題

『古本説話集』（以下、「本集」と略称）は、昭和二十四年「新指定国宝展」で世に知られた。翌年、梅澤彦太郎氏の所有に帰し、以来、題簽も内題もないため『梅澤本　古本説話集』と称されることが多い。梅澤記念館・文化庁旧蔵、現在は東京国立博物館所蔵である。

本書の書誌等については、『梅澤本　古本説話集』（貴重古典籍刊行会編、貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）の田山方南氏の解説、および『梅澤本　古本説話集』（古典資料類従六・勉誠社・一九七八年）の川口久雄氏の解説に詳しい。墨付全部一三六丁。奥書識語はなく、冒頭二丁オ～四丁オ、および六〇丁ウ～六一丁ウに、目録（漢字表記の表題を本文の説話配列に従って列記したもの）がある。全七十話が、前半四十六話、後半二十四話に二分され、一般に前半を上巻、後半を下巻と称されている。

本書の説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と共通のものが多い上、『世継物語』『打聞集』などの小説話集との重なりも多く、類縁性や前後関係が論じられてきた。しかし、諸説話集の伝本の一つ、あるいは異本・抄本とは考えにくく、また、どの説話集とも相互の承接関係は証明されず、それらの諸説話集との共通祖本が想定されている。現在のところ、天下の孤本とみるべきである。

成立年代、編著者（筆録者）、成立事情等は不明であるが、『古本説話集総索引』（山内洋一郎編・風間書房・一九六九年）の刊行以来、日本語史的な観点からの研究も進められている。鎌倉中期筆写と思われる貴重な古写本である。

目録について

説話集には、説話本文とは別に目録や説話表題（説話本文の前に記載された表題）が付されているものが多い。本集には、巻頭および中間に目録が置かれている。原本の形に沿って注釈を加えるとすれば、まず冒頭の目録を訓み下し、解説すべきであるが、今回は各目録表題をそれぞれの説話の冒頭に置いて訓みを付すこととする。「注釈」に先立って、目録についての見解を述べる。

目録は本文の内容を知るための指標としての機能があり、本文と同じく研究の対象となるべきものであるが、これまで本文研究に比して、まともに考察することがほとんどなかった。その理由を考えてみると、

(i) 目録は、説話本文の付録としての認識が強く、便宜的に取り扱う態度があること。

(ii) 目録の作成者が本文の編著者と同一とは限らず、別人（同時代あるいは後代の人）と考えられるものもあるということ。

(iii) そのためもあって、目録と説話本文との間に齟齬が生じ、その指標としての機能が問題になること。

などが挙げられる。

以上のことから、これまでの諸家の注釈書等を見ても、目録や説話表題そのものを全体として眺め、その内部構造・説話本文との関係・目録作成者・説話表題の訓み等を考察したものはほとんどない。『梅澤本　古本説話集』（前掲書：「解題」の項）の川口久雄氏の解説（P.285）には、数例の訓み方が示されている。しかし、目録が作品に載せられている以上、それを等閑視する態度は正しいとは言えない。このような立場から、目録および説話表題を対象として、改めて研究の視点をもって眺めることにしたい。

さて、本集は原本六〇丁のところで前後に分かれ、説話本文（全七十話）は、前半（四十六話）・後半（二十四話）の構成となっている。そして、前半・後半そ

（四）

れぞれの冒頭に、目録が記載されている。この二つの目録について、先に述べた、その内部構造・説話本文との関係・目録作成者・目録表題の訓み等について、いくつかの見解を公にした[注]。その要点を述べると、

(a) 前半の目録には比較的単純な目録表題（「人名＋事」、「人名―（和歌）―事」など）が多く、後半の目録には、文構造の上で、主語・述語・目的語等を具備する、より長く複雑な表題が多いので、訓読上注意が必要である。

(b) 変体漢文を基調とする本目録の表題を訓読するにあたり、対応する説話本文の表現を基本にして、他の説話集（『今昔物語集』『宇治拾遺物語』など）等の表現も参照して、特に補読の仕方（時制の助動詞、待遇表現）や、ノ・ガ両助詞による尊卑表現の区別を明確にする。

(c) 目録の作成者は、対応する説話本文の内部徴証よりみて、本文の編著者とは別人、それも後代の人であると考えられる。

これらの知見をもとに、本集の二つの目録にみられる表題を明確な基準のもとに訓読していくことにする。

本集には、説話表題は見られないので、それぞれの該当説話本文の前に目録表題を掲げ、訓読した形で示す。

【注】・古本説話集目録の性格と訓読
（山口康子、福田益和　「国語学会」口頭発表・一九七二年五月）
・古本説話集目録訓読についての一問題――古本説話集の場合――
（山口康子、福田益和　『解釈』一九七二年十一月号）
・古本説話集「目録」訓読についての一視点――人物をうける「の・「が」――
（山口康子、福田益和　『季刊　文学・語学』第66号・一九七三年三月号）他
なお、本集『目録』の数少ない先行研究には、児玉識氏の「中世説話集の文献学的一考察――梅沢本古本説話集を中心にして――」（『宇部工業短期大学高等専門学校研究報告』一巻一号・一九六四年）がある。また、森正人氏の『古代説話集の生成』（笠間書院・二〇一四年）の序章・第一章に、説話集における目録・標題の役割について、言及・指摘がある。

凡例

解題

本集の概要について述べる。

目録について

本集に付されている「目録」について述べる。

一　表題

本集には、説話表題（説話本文の前に記載された表題）は見られないので、目録表題をそれぞれの該当説話本文の前に掲げ、訓読を振り仮名の形で示す。その根拠については、各説話の口語訳の次に、項目を立てて述べる。また、川口久雄校訂『梅澤本　古本説話集』（岩波文庫・一九五五年）以下の註釈にならい、説話の話番号を（　）をつけて付し、（第一）（第二）の形で示す。

二　本文

1　底本は、東京国立博物館所蔵（梅澤記念館・文化庁旧蔵）『古本説話集』を用いた。『梅澤本　古本説話集』（貴重古典籍刊行会編、貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）、『勉誠社文庫124 古本説話集』（川口久雄解説・勉誠社・一九八五年）「e國寶　国立博物館所蔵　国宝・重要文化財」（http://www.emuseum.jp/top?dlang=ja）を参照する。

2　底本の一丁を二頁として、表をオ・裏をウと表記し、行数を本文の上に算用数字で記す。なお、勉誠社文庫の頁数を（　）で示す。

3　原文の漢字はそのまま漢字で表記し、原文に近い字体を選ぶ。

4　訓みをつけるときは、歴史的仮名遣いを用い（　）で囲む。
　例　大齋院（おほさいゐん）・申（まうす）は

5　反転記号・繰り返し記号・見せ消ち等は原文どおり表記し、必要に応じて注をつけるか、「語釈・語法」の項で説明する。

6　原文の仮名表記を、漢字表記にするときは、振り仮名として原文の仮名をつける。表記する漢字は、現行の漢字とする。　例　大殿（おほとの）・斎院（さい）

7　仮名違いは、右側に正用を【　】で示す。　例　なを【ほ】

8　必要に応じて句読点・濁点・引用符をつけ、会話文には「。」をつける。

三　対照説話

対照すべき説話を、本集本文の行切りに合わせて記載する。テキストは、『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』など一般的なものを選ぶ。

四　口語訳

逐語訳を心がけ、必要に応じて適宜主語等を（　）で補う。

五　語釈・語法

丁の表（オ）・裏（ウ）ごとに、該当箇所の行数を算用数字で示し、特に日本語学的視点を取り入れるよう心がける。

六　補説

特に詳述する必要のある問題についての考察を記す。

七　類話

紙幅の都合上、各話の末尾につける予定である。

八　参照テキスト

略号とテキストは次のとおりである。

岩波文　『梅澤本　古本説話集』川口久雄校訂・岩波文庫・一九五五年
全　書　『古本説話集』日本古典全書・川口久雄校註・朝日新聞社・一九六七年
総索引　『古本説話集総索引』山内洋一郎編・風間書房・一九六九年
全註解　『古本説話集全註解』高橋貢・有精堂・一九八五年
新大系　『古本説話集』新日本古典文学大系42・『宇治拾遺物語』と併録・中村義雄、小内一明校注・岩波書店・一九九〇年
全訳注　『古本説話集　上下』高橋貢全訳注・講談社学術文庫・二〇〇一年

九　参考文献

参考にした文献については、できる限りその部分に書き入れる。記載できなかったものは、各話の末尾につける予定である。

大齋院事（第一）

【五丁オ】（一三頁）

1 今は昔、大齋院と申は、村上の十の宮に
2 おはします。御門の、あまたたび〳〵、替はらせ
3 給へど、この齋院は、動きなくておはしまし
4 けり。齋宮・齋院は、佛・經忌ませたまふに、この
5 齋院は、佛・經をさへ崇め申させたまひて、
6 朝ごとの御念誦、欠、せたまはず、三尺の阿弥陀
7 仏に向かひまいらせさせたまひて、法華經
8 を明け暮れ誦ませ給けりと、人申伝へたり。
9 賀茂祭の日、「一条の大路に、そこら集ま
10 りたる人、さながらともに仏に成らん。」と誓

【五丁ウ】（一四頁）

1 はせ給けるこそ、なをあさましく。さて、この世の
2 御栄華を、とゝのへさせたまはぬかは。御禊より
3 はじめ、三日の作法、出だし車などのめでたき
4 は。御心様、御有様、大方優にらう〳〵し
5 くをはしましたるぞかし。宇治殿の、兵衛佐に
6 て御禊の御前せさせたまひたりけるに、いと
7 幼くおはしませば、例は本院に帰らせ給て
8 人〳〵に禄などたまはするを、これは河原より
9 出でさせたまひしかば、思ひかけぬ事にて、

『大鏡』（日本古典文学大系21・一九六〇年・岩波書店　底本：東松本）

いつきの宮よにおほくおはしませど、
これはことにうごきなく、よにひさしくたもちおはします。
たゞこの御一すぢのかくさかへたまふべきとぞみ申。
むかしの齋宮・齋院は佛經などのことはいませ給けれど、この
宮には佛法をさへあがめ給て、
あさごとの御念誦かゝせたまはず。ちかくは、この御寺のけふの講には、さだまりて
布施をこそはをくらせたまふめれ。いとゝうより神人にならせたまひて、いかでかゝ
る事をおぼしめしよりけんとおぼえさぶらふは、
賀茂のまつりの日、一條の大路にそこらあつま
りたる人さながらともにほとけとならむと、ちか
はせたまひけんこそ、なをあさましく侍れ。さりとて又、現世の
御榮花をとゝのへさせたまはぬか。御禊より
はじめ三箇日の作法、出車などのめでたさ、
おほかた御さまのいと優に、らう〳〵じ
くおはしましたるぞ。いまの關白殿、兵衛佐に
て、御禊に御前せさせたまへりしに、いと
おさなくおはしませば、例は本院にかへらせたまひて
人〳〵に祿などたまはするを、これは河原より
いでさせたまひしかば、おもひがけぬ御事にて、

（六）

10 さる御心設けもなかりければ、御前に召し有て、

【六丁オ】（一五頁）

1 御対面せさせたまひて、たてまつりたりける

2 御小袿をぞ、かづけたてまつらせ給ける。入道

3 殿聞かせ給て、「いとをかしくもし給へるかな。禄な

4 からんも便なく、取りにやりたらむもほど経ぬべ

5 ければ、とりわき給へるさまを見せたまへる也。

6 えせ物は、え思ひよらじかし。」とぞ、殿は申させ

7 たまひける。

さる御心まうけもなかりければ、御前にめしありて、

御對面などせさせたまひて、たてまつりたまへりける

小掛をぞかづけたてまつらせたまへりける。入道

殿きかせ給て、「いとおかしくもし給へるかな。祿な

からんもたよりなく、とりにやりたまはんもほどへぬべ

ければ、とりわきたるさまをみせたまふなめり。

ゑせものは、えおもひよらじかし」とぞ、申させ

たまひける。

口訳

今は昔、大斎院と申し上げる（方）は、村上天皇の第十皇女でいらっしゃる。天皇が何度も何度もお替わりになられたが、この斎院は替わることがなくていらっしゃった。斎宮と斎院は仏像や経典を忌みお憚りになられたが、この斎院は仏像や経典までも敬い申し上げなさって、毎朝の御念誦をお欠かしにならず、三尺の阿弥陀仏に向かい申し上げなさって、『法華経』を朝に夕にお誦みになったと、人々が申し伝えている（ということだ）。

賀茂祭の日、「一条大路に多く集まった人々は、そのまま皆私とともに仏に成りましょう。」と（大斎院が）誓願なされたことは、やはり驚くべきことであった。そうはいっても、この現世での御栄華を欠けることなく備えていらっしゃらないというわけではない。御禊の儀式をはじめとして、三が日の作法、出だし車などの何と見事なことか。お気立てや振舞いが総じて優美な上に、品位ある円熟さがおありであることよ。

宇治殿（頼通公）が、兵衛佐で御禊の前駆をなさった時に、（宇治殿は）たいそう幼くていらっしゃったため、（大斎院は）いつもは本院にお帰りになって人々に祝儀などを下さるのだが、宇治殿が賀茂河原よりわが家にお戻りになったので、それは予想もしなかったことで、そのようなご準備もなかったので、（宇治殿を）御前にお召しになってお会いになり、身につけておられた御小袿を祝儀として、お授け申し上げなさった。（そのことを）入道殿（道長公）がお聞きになって、「たいそう風情深いことをなさいましたね。祝儀を出さないのも不都合ですし、（本院へ）取りにやるにしても時間がかかってしまうでしょうから、特別のお志の程をお見せになったものです。いい加減な心構えの人には思いつけないことですよ。」と、入道殿は（大斎院のことを）申し上げなさった。

（七）

表題　大齋院（おほさいゐんのこと）事　（第一）

右の訓みについて、二つの問題点がある。

その一は、「大齋院」と「事」を結ぶ助詞の問題である。

この表題の形式は、前半目録所収の四十六表題中、二十六表題共通の形式であり、それは、「人名（和歌作者）―事」の単純な語構成。その共通形式で問題となるのは、人名（和歌作者）を「事」字に続けてよむ場合、連体格助詞「の」でよむか、「が」でよむか、という問題である。それを決める第一の基準は説話本文の内部徴証であると考えられる。その類話や他資料を援用することも必要であろう。

ここで、説話本文にあらわれる人物で、目録表題にもみえる人物について、「の」・「が」両助詞の使われ方をみると、その事例は、たとえば次のとおりである。（用例の傍線は筆者による。）

（和泉式部）……「和泉式部がもとに」（一七オ7）
「いづみしきぶがむすめ」（一九ウ4）
（伊勢大輔）……「伊勢大輔のまごなりけり」（二三ウ4）
「伊勢大輔の御しそん」（三二ウ6）
（道　済）……「みちなりがは」（三六オ6）
「みちなりが哥」（三九ウ1）

人物ごとに、「の」・「が」が区別して用いられている。そして、「の」助詞の用いられた人物には敬語表現があり、「が」助詞の用いられた人物には敬語表現が見られない。これをもとに、本集では、人物を受ける「の」・「が」両助詞による尊卑表現の区別があると認められる。

「大齋院」について、対応する説話本文の表現に徴すると、

「村上の十の宮におはします」（五オ2）

「この齋院は、佛・經をさへあがめ申させたまひて」（五オ5）

（八）

と敬語表現が顕著であり、類話等でも、

「大斉院ト申スハ、村上ノ天皇ノ御子ニ御マス。円融院天皇ハ御兄ニ御セバ、其ノ御時ニ斉院ニハ立セ給ヘル也」（新大系『今昔物語集』巻第十九第十七・P159）

「そのとゞまりおはします女宮こそは、大齋院よ」（大系『大鏡』第一巻・P51）

と、敬語表現が見られる。よって、表題の「大齋院」を受ける連体格助詞は「の」であると考えられる。

他の二十五表題についても同じ方法で「の」・「が」両助詞の区別をすべきである。「注釈」の中で、その都度示す。

その二は、「大齋院」の訓みの問題である。これまで「だ（た）いさいゐん」・「おほさいゐん」両様の訓みがあり、いずれが適切か明確ではなかった。この訓みについて論じられたものは、管見によれば一つのみ。すなわち、高田信敬氏の「大齋院名義考証」（『創立三十周年記念　鶴見大学文学部論集』一九九三年三月）である。高田氏は、

「村上天皇の御むすめおほさいゐん」（『源氏大鏡』一類　古典文庫508）
「村上の天皇の御むすめ大斎院おうさいゐん」（祐倫『光源氏一部謂』）

等のいくつかの仮名表記事例を提示して、この訓みは中世から近世初期まで確実に行われ、今日「おほさいゐん」の訓みは少数派ではあるが、これを是とすべきである、とされる。今、この例示用例の意味を認め、現状では「おほさいゐん」とよむのが穏当であると判断する。なお、この件に関しては、語学的視点から改めて考察する必要があると考えられ、それは、別稿「接頭語『大』の訓みと語構成に関する一考察――鎌倉時代以前を中心に――」（『人間文化研究第十五号』長崎純心大学大学院人間文化研究科編・二〇一七年三月　掲載）に託した。併せて、参照されたい。

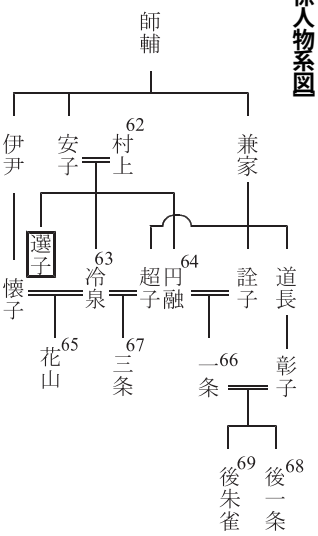
語釈・語法

【五丁オ】

●1今は昔、　８行目「人申伝へたり。」に呼応。「今は昔」に呼応する文末形式が、説話全体の末尾ではなく、途中に入った特殊な形。例えば、『今昔物語集』においては、全一〇五九話のほぼすべてが、「今ハ昔」で始まり、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」と結ぶ語りの形式を持っているが、本集においては、全七十話すべてが「今は昔」と語り出しながら、末尾の形式は多種多様で、本集における語りの形式は形骸化していると認められる。詳しくは『『古本説話集』研究上の諸問題（四）――『大和物語』との類似性――』（『人間文化研究　第十四号』長崎純心大学大学院人間文化研究科編・二〇一六年三月）を参照されたい。

●1　大齋院　（九六四～一〇三五）選子内親王。村上天皇第十皇女。

［関係人物系図］



母は藤原師輔女の中宮安子。冷泉・円融天皇の同母妹。天延三年（九七五）、十二歳の時に斎院に立ち、第八十四代円融天皇より第六十八代後一条天皇に至る五代・五十七年にわたり、奉仕した。長元四年（一〇三一）退下、出家。同八年に薨去、七十二歳。『賀茂斎院記』等によれば選子が上東門院に「新奇之草子」を所望したので、紫式部が『源氏物語』を書いたのだという。『発心和歌集』を編んだとも言われているが、異論もある（『『発心和歌集』選子内親王作者説存疑』久保木秀夫・中古文学会編「中古文学」九十七号・二〇一六年六月参照）。本集には、第九・三十七・四十二・四十三話にも登場。

●1　村上　（九二六～六七）第六十二代天皇。天暦五年（九五一）『万葉集』の訓釈および『古今集』に続く勅撰和歌集の編纂を目的とした和歌所を設置した。「天徳四年（九六〇）の内裏歌合」をはじめとする、村上天皇主催による多くの歌合が行われた。康保四年（九六七）五月二十五日、崩御。四十二歳。本集には、第三十九話にも登場。

●2御門のゝ　『岩波文』は、「みかどの」の下の「ゝ」印は「普通誤脱の標示である。」とするが、筆のかすれとみる。『大鏡』本文とも対照して、ここは誤脱なしとみる。

（「e國寶　国立博物館所蔵　国宝・重要文化財」http://www.emuseum.jp/top?d_lang=jal　による。本集の影印引用は、以下、すべて同じ。）

●2あまたたび〱、**替はらせ給へど、**　『総索引』『新大系』は、反転記号レ点を認め、「たび〱あまた」とよむ。『全註解』『全訳注』は、レ点は影印本では不明瞭として本文に反映させていない。「あまたたび〱」でも「たび〱あまた」でも意味するところは同じ。

（九）

（一〇）

●**2せ給へど、**　「せ給ふ」は、最高敬語。「敬語の文学的考察――源氏物語の本性（其二）――」（玉上琢彌・京都帝国大学国文学会編「国語国文」21(2)・一九五二年三月）に示されているとおり、帝に対する最高の敬意を指す。

●**3齋院**　「斎院」は賀茂神社に奉仕した未婚の内親王・女王をいう。天皇の崩御・譲位の他、自身の父母の喪などの特別事由で退下した。

●**3動きなくて**　斎院の交代がなくて。

『日本紀略』には次の記事がある。

天延三年（九七五）六月廿五日丙寅。卜定賀茂斎王。先朝第十選子内親王也。

永観二年（九八四）九月五日壬子。斎院選子内親王依舊不改之由。

寛和二年（九八六）八月八日乙辰。但賀茂斎院不改。

長和元年（一〇一二）四月十九日丙辰。賀茂斎院不改例。

長元四年（一〇三一）九月廿二日丁卯。夜。賀茂斎院選子内親王依有老病。私以退出。

『御堂関白記』（長徳四：九九八～寛仁五：一〇二一）には次の記事がある。

長和元年（一〇一二）四月廿三日、庚申、…略…明日可被申不替斎王由、

長和元年（一〇一二）四月廿四日、辛酉、…略…被申斎王不替由、

長和五年（一〇一六）二月廿五日、庚子、…略…不改斎院由奉。

●**4斎宮・斎院**　「斎宮」は伊勢神宮に奉仕する未婚の内親王、または皇族の女性。「斎宮」「斎院」ともに、その方の居住した御所も指す。なお、斎宮・斎院ともに「斎王」と呼ぶ。

●**4佛・經**　五丁オ6・7に「阿弥陀ほとけ」「法華経」と具体的に記述されているので、「ほとけ・きやう」とよむ。仏像と経典のこと。五丁オ5の「佛・經」は、『大鏡』では「佛法」となっている。

●**4忌ませたまふに、**　斎王は、ひたすら神に奉仕する身で、仏教に帰依することはできず、不浄をあらわす言葉や、仏教に関した言葉を忌詞として避ける生活を送っていた。『延喜式』には、斎院忌詞として「巻第六　神祇六　斎院司」に、「凡忌詞。死称直。病称息。泣称塩垂。血称汗。完称菌。打称撫。墓称壌。」をあげる。それ以外に、斎宮には仏教に関する忌詞がある（「巻第五　神祇五　斎宮」）。当時の仏教的観点からは、斎宮・斎院に対して、「斎院。罪ふかゝなれど、をかし。」（新大系『枕草子』一本二五段・P344）とあるように、「罪深い身」とされていた。『大鏡』に「いませ給けれど」とあることも勘案し、「に」は逆接の接続助詞とみる。

●**5佛・經をさへ**　本集の地の文の「さへ」はここ一例。「をさへ」の用例も本例のみ。あとは「我さへ」「そらさへ」「まつさへ」といずれも歌語にみえる。

●**5崇め**　『類聚名義抄』観智院本には「崇　アカム」、図書寮本には「崇　アカム」とあるので、「アガム」とよむ。

●**6御念誦**　仏の名号、あるいは経文を誦み上げること。『総索引』は「ねんず」、『全書』『全註解』『全訳注』は「ねんじゅ」とする。『源氏物語』には、「念誦」十二例、「御念誦」三例をみる。「御ねんすなとし給ふも」（新大系『源氏物語　二』須磨巻・P38）、「御ねんすし給て」（新大系『源氏物語　二』明石巻・P155）、「御念すのひまくには」（新大系『源氏物語　四』橋姫巻・P301）など、用例十五例はすべて「念（ねん）す」である。それも勘案し、「ねんず」とよむ。

●**6三尺**　一尺は、約三〇・三センチメートル。字音シャクの古い形。日本語の音韻体系の中で変化が生じているものとみて、「サカ」とよむ。『日本書紀』巻第廿四皇極三年夏六月の条に、「其莖長八尺」（岩崎本皇極紀平安中期点）とある。また、『万葉集』巻第十六・三八二一「美麗物　何所不飽矣　坂門等之　角乃布久礼尓　四具比相尓計六」の左注に、「右、時有娘子。姓尺度氏也。（以下、略）」（新大系『萬葉集　四』）という記述がある。補注には、「第三

句の『坂門ら』は左注の『尺度氏』に当たる。」とあり、「尺」を「坂（さか）」と訓む傍証になる。

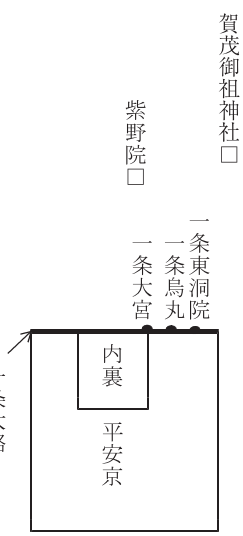
●**6阿弥陀仏**　西方極楽浄土の主。この仏を信仰すると、臨終の際に来迎し、死後に極楽に迎えられると信じられた。阿弥陀如来。岡崎知子氏の『平安朝女流作家の研究』（『大齋院選子の研究』法蔵館・一九六七年）によると、選子が賀茂斎院在職中に、阿弥陀仏に向かい、法華経を朝夕誦まれたということは、確かな記録にみえることではないが、選子の和歌として『金葉集』（巻第十雑部下・六三〇）に「阿弥陀仏ととなふる声に夢さめて西へ流るゝ月をこそ見れ」、『詞花集』（巻第十雑部下・四一〇）に「思へども忌むとていはぬことなればそなたにむきて音をのみぞ泣く」（『古本説話集』第四十三には初句を「なをだにも」とする）の歌によって、「選子内親王の信仰は法華経受持による西方願生であった」とする。

●**7向かひまいらせたまひて**、「まいらせ」の「い」は「ゐ」の仮名違い。本集には、動詞二十一例・補助動詞二十九例用いられているが、すべて「い」で統一されている。

●**7法華経**　『法華経』は、平安朝において一般に広く信仰された経典である。『更級日記』に、「夢に、いときよげなる僧の、黄なる地の袈裟きたるが来て、『法華経五巻を、とくならへ』といふを見れど」（新大系・P386）とある。八巻本の『法華経』第五巻提婆達多品は、女性の成仏を説くことで女性の支持を集めた。『王朝文化歴史大事典』（小町谷照彦、倉田実編・笠間書院・二〇一二年）「女人往生」の項に詳しい。

●**9賀茂祭**　京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭礼。古くは四月第二の酉の日、現在は五月十五日に行われる。葵の葉で牛車や簾、社殿や祭人の冠（葵鬘）などを飾り、賀茂の家々の門にも葵をかけたので葵祭ともいう。弘仁元年（八一〇）斎院がおかれ、皇女有智子内親王が斎王になって以来、同祭に奉仕するようになった。祭に先だって、斎王は賀茂川で禊を行い、祭当日は勅使および東宮、中宮の使いとともに行列を整え両社へ参向した。その行列は華麗を極め、多くの見物人が集まった。『延喜式』「巻第六神祇六齋院司」に詳しい記述がある。なお、『大鏡』には「賀茂のまつり」とあり、本集でも「の」を補読して「かものまつり」とよむ。

●**9一条の大路**　平安京の最北端を東西に走る大路。『延喜左右京職式』の京程には、北極大路と記載されており、道幅については「広十丈」とあるが、同じ京程に「羅城外二丈」の記載もあり、『拾芥抄』では十二丈としている。明確な結論をみていないが、いずれにしても平安京の京域を画する大路である。一丈は、約三・三メートル。賀茂祭当日は、内裏から一条大路を東に向かう勅使一行と、紫野院から南に向かう斎院一行が一条大宮で合流し（路頭の儀）、賀茂御祖神社に向かい、賀茂別雷神社を経由して、翌日紫野院に帰院した。『源氏物語』葵巻にみえる賀茂祭の斎院の御禊に際しては、勅使の一人として若き光源氏が供奉していることもあって、一条大路の見物人が大変な数にのぼったと語られている。また、『栄花物語』巻第十三などに記載されているように、賀茂祭の時には、祭礼を見物するために多数の桟敷が貴族たちによって設けられていた。賀茂祭が賑わいを見せた平安中期から鎌倉時代にかけて、桟敷の設営地は、次第に一条大宮・一条烏丸・一条東洞院に固定化された。図示すれば、次のとおりである。



（一一）

●**9そこら**　数や分量の多いさま。そんなにたくさん。『平安女流文学のことば』（P.215・木之下正雄・至文堂・一九六八年）には、「そこら」は、女流文学用語で、中世では、この語は古典的な感じのことばになっているとする。また、副詞として動詞を修飾するのが本来の用法とし、話し手から遠い第三者に関わる動詞を修飾するとされる。大斎院は人々から離れた場所にいるのである。

●**10さながらともに仏に成らん。と誓はせ給けるこそ、**『法華経』化城喩品第七に「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道（願はくは此の功徳を以て　普く一切に及ぼし　我等と衆生と　皆共に仏道を成ぜん）」とある。この偈は勤行の最後に唱える廻向文に用いられている。賀茂祭の当日、選子がこの偈文をもって誓ったことの意味については、岡崎知子氏の『平安朝女流作家の研究』（前掲書・五オ6「阿弥陀仏」の項）「大斎院選子における神と仏」に詳しい。

【五丁ウ】

●**1なをあさましく。**　本集には、「なほ」という正用の例はない。十五例すべて「なを」で統一されている。「あさましく」の下を読点にする考え方もあるが、『大鏡』「あさましく侍れ。」の例、本集五三丁ウ9「いと〳〵くちをしく。」の例もあり、「あさましく」の下は、句点で文が切れるとみる。「あさまし」は、現代では悪い意味だけで使われるが、もともとは意外なことに驚いたりあきれたりする意が原義。よい場合にも悪い場合にも用いた。本集では二十五例用いられているが、仏の功徳に関する場合はすべて、感動するなど、よい意味で用いられている。ここでは、大斎院の誓願に編著者は感動しているのである。

●**1さて、**「さて」は、『大鏡』の該当部分が「さりとて又」とあることからも、逆接にとる。前文の仏を信仰して後世の安楽を願うことに対して言う。本集には、「さて（さても）」は三十三例ある。大半は順接の意味だが、順接・逆接いずれの解釈も可能な用例がある。確実に逆接の意味を持つ用例は、「かはらむとおもふいのちはをしからでさてもわかれむほどぞかなしき」（十七オ1）である。なお、本話の文末部分「この世はめでたく心にくゝいふにて過ぎさせ給へるに、後の世いかゞと思ひまいらせしに」（十一オ2・3）は、この部分と対応していると考えられる。末尾の「に」は、第一話後半部の類話『今昔物語集』との対応本文「思ヒケルニ」から考えても逆接であろう。

●**2御栄華**　本集では、本例のみ。『大鏡』には「御栄花」とある。『色葉字類抄』前田本（三巻本）には、「榮華（同（入音部）エイクワ）」（下巻八九オ7）とある。「ゑ」は、当時の字音仮名遣いでは一般的なものであろう。

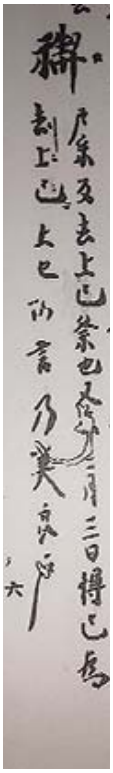
●**2とゝのへさせたまはぬかは。**　「ととのふ」は、「欠けることなくすべて備わる」の意。一般に四段・下二段活用があるが、本集ではこの下二段用例一例のみ。『岩波文』では、「とゝのへ」の下に挿入記号を入れるが、『総索引』で指摘されているように、筆のかすれと見る。おそらくは、筆の重みによるものであろう。「かは」は反語。

●**2御禊**　賀茂祭の前の午の日か未の日に行われた。「禊」とは、主に神道で、自分自身の身に穢れのあるときや、重大な神事などに従う前、またその最中に自分自身の身を清水、滝、河川や海水で洗い浄めることを言う。天皇・斎宮・斎院が神事の前に、賀茂川や桂川などで行った禊ぎを「御禊」とよんで、敬意を表した。本用例の「禊」の字体は、天治本『新撰字鏡』（『天治本　新撰字鏡（増訂版）附享和本・群書類従本』）にみえる。本集では、他に五丁ウ6に一例あるが、字体は「禊」である。

本集〔五ウ2〕

本集〔五ウ6〕

天治本『新撰字鏡』



●**3 三日の作法**、『大鏡』には、「三日」は「三箇日」とある。よって、ここも「さんがにち」とよむ。「作法」の「法」は、入声。呉音「ホフ」・漢音「ハフ」で、古くは発音によって意味が異なっていた。混同し始めた中世末期の『ロドリゲス日本大文典』（一六〇三～一〇四）には、両者の違いが述べられている。「ハフ」は「ひろがる（開意）」で、法則・規定・命令や、主人が家来のために設けた規約を意味する場合に使用されるとし、「礼法」などの例を挙げる。一方、「ホフ」は「すばる（合意）」で、仏法上の教法や教義を意味する場合に使用されるとし、「妙法蓮華経」などの例を挙げる。「三日の作法」は、仏法上の教法ではないが、広く宗教上のきまりとみて、「さほふ」とよむ。なお、本集の「法」の仮名書き用例は、「ほうし」（四一ウ4）・「そのほうをならひて」（二〇ウ9）など十一例ある。いずれも「ほう」である。

令制では、国家の祭祀を禊の期間により、大祀・中祀・小祀に分けている。「大祀」は天皇即位時の大嘗祭だけで、一ヵ月の斎戒を伴っていた。「中祀」は賀茂祭などで、当日を含む三日間の斎戒があった。「小祀」は、鎮花・神衣・三枝・大忌・風神・道饗・鎮火・相嘗・鎮魂の諸祭で、当日だけの斎戒であった。

「三日の作法」とは、四月中午日（不都合な場合は未の日）の斎院の御禊、中申日の賀茂下上両社による国祭、中酉日の本祭を指す。当日は、宮中の儀、路頭の儀、両社での神事である社頭の儀が行われた。

なお、『公事根源』「七十七関白賀茂詣」には「天禄二年九月廿六日摂政右大臣謙徳公かも詣之事有是摂関の人かもまうての始なるへきそこのことはかならすかも祭のまへの日ある事なり」とあり、中申日の国祭には天禄の頃から、摂政・関白が両社へ詣る「摂関賀茂詣」が恒例となったようである。

●**3出だし車**　行幸・諸儀式・賀茂祭などに女官・女房たちの乗る牛車で、車の簾の下に衣の裾などを押し出して乗っているのをいう。

●**3めでたきは**。「めでたきは。」ととる。『岩波文』『全書』以外は、「めでたさは」とするが、字形を検討の上、「き」と判読する。また、参照テキストすべて「は」の下を読点とするが、「は」の下を句点として、ここで文を切る。「めでたし」は、対象を社会的に公認された価値のある結構なもの、ありがたい立派なものとして崇め、慶賀し、賞賛する気持をいう。神仏に関わるものに用いられる例が多い。ここでは、「大斎院」の賀茂祭の神事に関わる出来事・事柄が賞賛すべきさまであることを示す。本集では、本用例以外に三十六例ある。第一話には、本例を入れて六例、いずれも、大斎院に関する事柄を褒め讃えている。　→ 補説1

●**4 優に**　正用は「いう」である。本集には本例を含めて五例あるが、すべて「いふ」の表記である。意味は、めでたく足り整っていて、すぐれているさま。平安時代の理想的な性格を示す。「いふに」と次の「らうらうし」は並列の関係と見る。

●**4らう〳〵しく**　木之下正雄氏は「清音にも濁音にも読まれるが、畳語形容詞なので、清音であろう」とする（『平安女流文学のことば』P72）。『古典基礎語辞典』（大野晋・角川学芸出版・二〇一一年）は、「労労じ」ととり、「『労』には、功労や熟練、また、経験を重ねた人に見える行き届いた心遣いの意味が

（一三）

あることから、ラウラウジは、することに心が行き届いているさま。気が利いて含蓄のあるさまに物事をこなしていく、よくできた練れた感じをいう。」とする。大斎院の心様・有様を総括的に讃美している表現である。本集ではこの一例のみ。

●**5宇治殿**　（九九二～一〇七四）藤原頼通のこと。道長の第一男。後一条・後朱雀・後冷泉の三朝にわたり摂政・関白となり、父道長とともに藤原氏全盛時代を築いた。天喜元年（一〇五三）宇治平等院鳳凰堂を建立、「宇治殿」と呼ばれた。本集には、本話のみに登場。

●**5兵衛佐**　左・右兵衛府の次官。「兵衛府」は、令制で、宮城の警衛や巡検、内裏外側の諸門の警備、行幸の警護などを任務とする左右の二府で構成された官司。官位は、延喜式制によれば、五位に相当する。

●**6御前**　「御前駆」の略。貴人の前駆。行列の威儀を整えるため、馬に乗って先導するものをいう。　→**補説2**

●**6いと幼くおはしませば、**　主語は「宇治殿」。「（河原より）出でさせたまひ」にかかる。「をさなし」が正用。本集には、本用例以外にも三例出現する。「をさなく」（六オ8）・「をさなかり」（二六ウ10）・「おさなく」（一一四オ2）のごとくである。『大鏡』のこの部分は、「おさなく」である。いずれにせよ、「お」と「を」の混用が見られる。なお、大野晋氏は、「仮名遣の起源について」（東京大学国語国文学会編・『国語と国文学』一九五〇年十二月号）の中で、「お」と「を」の使い分けの基準が、平安末期から鎌倉初期にかけての時期におけるアクセントの平声（低く平らな発音）の音節と上声（高く平らな発音）の音節との違いを書き分けているものであること、その書き分けは定家以前の古辞書『色葉字類抄』などにすでに見出され、定家はこの基準をこれらの文献から得たであろうこと、自筆本にその仮名遣いを実際に使用していること、鎌倉時代中期以降には、アクセントの歴史的変化の結果、この書き分けが乱れていったこと、などを解明されている。　→**補説3**

（一四）

●**7例は本院に帰らせ給て人〳〵に禄などたまはするを、**　本集の「例は」の用例はここ一例のみ。他は「れいならず」「れいならで」「れいの」「れいさまに」とある。「本院」は、斎院の御所のこと。紫野（上京区）の有栖川の傍らにある。この日、本院では祝儀を用意し、饗宴を設けた。『江家次第』巻六に詳しい。「例は本院に帰らせ給て人〳〵に禄などたまはするを」は挿入句で「大斎院」について言ったことばである。

●**8禄**　「禄」は今でいう給料、俸給。朝廷の官人すべてが朝廷から賜る生活費。こうした給与とは別に、私的で臨時の褒美や祝儀を意味する用例も多く見られる。ここでは、後者の例であろう。

●**10御心設け**　心の準備・心づもり・心支度のこと。ここでは、大斎院の、宇治殿に対する禄の準備を指す。

●**10御前**　神仏や貴人の前を敬っていう。本集には、本例を入れて二十二例ある。「御前」十例、「御まへ」十一例、「おまへ」一例である。

●**10召し有て、**　「有」は敬意を含む名詞を受けて、敬意の度の高い尊敬表現となる。お～になる。お～あそばす。お～なさる。山田孝雄氏は、『平家物語の語法　上』（P951・宝文館・一九五四年）の中で「『アリ』は或は本来の存在の意義を以て、或は、汎く動詞の叙述の力のみを代表して、その上に来るところの名詞と相保合して一種の敬語となすことあり。『アリ』の用法を案ずるにその上に来るべき語が、特に尊敬の意を表はすものにあらざるものなる場合と、尊敬の意をあらはせる意のものなる場合とあり。而、その『アリ』の上に来るべき語は名詞なるあり。動詞の連用形を仮に体言としたるあり。動作作用の意ある漢語なるありとす。」とする。

【6丁オ】

●**1御対面**　きちんと顔と顔を向かい合わせて会うこと。　→**補説2**

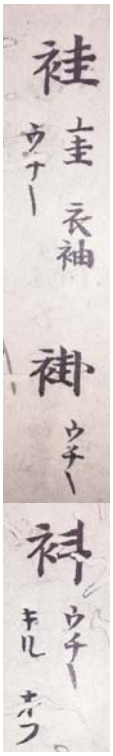
●**2御小袿**　重袿の上に唐衣を着て裳をつける女房装束の正装に次ぐ礼装。

唐衣の代わりに着用した。中宮や女御など、高位の婦人が常用とした上衣（うわぎ）で、様々の行事・儀式の折に下賜される禄の物、被物（かずけもの）にも多く用いられた。『総索引』において山内洋一郎氏は、「ウチキ」の清音の決め手に、『図書寮本類聚名義抄』「宇知岐（平上平）」をもってする。万葉仮名「岐」は甲類「キ」「ギ」にあてられるが、『図書寮本　類聚名義抄』には「宇●知●岐」（平上上）とあり、清音と考えられる。

『五本対照　類聚名義抄和訓集成㈠アーカ』（草川昇編・汲古書院・二〇〇〇年）

（観智院本）（蓮成院本）（高山寺本）（西念寺本）（図書寮本）

『類聚名義抄　観智院本』（法中七十四オ七行）（同七十六オ三行）



（天理図書館善本叢書33・八木書店・一九七六年）

『図書寮本　類聚名義抄』（三三九頁一行）

（勉誠社・一九七六年）

●**2かづけたてまつらせ給（たまは）ける。**　「かづく」は、貴人が褒美として衣服・布などを授け、相手の左肩に掛けること。『古今和歌集』声点本では「カヅク」。中世末期『日葡辞書』に、「Catçuguiguuida カッヅ，ゲ，イダ　…略…　本来の正しい語は、Cazzuqiqu（被き、く）である。」とあるように「カヅク」が規範的な語形と考えられたようである。

●**2入道殿（にふだうどの）**　（九六六～一〇二七）藤原道長のこと。父は兼家、母は時姫。兄道隆・道兼の死後、内覧・氏長者・右大臣となる。道隆の子伊周・隆家を失脚させ、娘彰子・妍子・威子を入内させて三代の外戚となる。長和五年（一〇一五）摂政となった。翌年、摂政を第一男頼通に譲って太政大臣となり、父子並んで政権を独占、藤原氏の全盛時代を出現させた。寛仁三年（一〇一九）出家、法成寺を建立。関白になった事実はないが、御堂関白と称され、日記を『御堂関白記』という。自筆原本が現存し、ユネスコの「世界の記憶」となっている。本集には、第五・四十三・五十・七十話にも登場。

●**3いとをかしくもし給へるかな。**　「をかしくも」は「風情深くも」の意。道長の評言。大斎院が、自分の身につけた小袿を「かづけ」させた臨機応変の処置と、身内の頼通が幼いのに大役を果たしたことに対する、身内ぼめの言といえる。

●**4便（びん）なく**　具合が悪いさま。多く、不都合で困ることにいう。　→**補説2**

●**5とりわき給へる**　「とりわく」の「とり」は接頭語。他と区別して特別に扱う。格別にする。

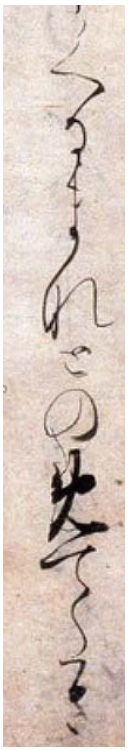
●**6えせ物（もの）**　山田孝雄氏の『平安朝文法史』（P474・宝文館出版・一九五二年）に、「『えせ』は蓋『えせぬ』の略語なるべく、もとは正しきものになりえぬことをいひたりとおもはる。」とあるように、「心さま」の問題とみなす。「御心様、御有様、大方優にらう〳〵しくをはしましたるぞかし（五ウ4）。」に対応する用語である。

●**6とぞ、殿（とぢ）は申させたまひける。**　『大鏡』には「殿は」の二字なし。本集は「殿は」と改めて会話の主語を入れており、会話引用の古い形を表す。「申さ」「せたまひ」と、敬意の方向の異なる二つの敬語が用いられている。本集では「申す」の謙譲用法は保たれているものとみて、そのニュアンスを口語訳に反映させた。

（一五）

補説1　五丁ウ3〜5「めでたきは〜をはしましたるぞかし」の解釈について

『岩波文』『全書』は「めでたきは」とするが、『総索引』において「き」ともよめると注記した上で「めでたさは」として以来、『全註解』『新大系』『全訳注』すべて「めでたさは」とする。本集の仮名字体については、山内洋一郎氏に「草体仮名の織り成す美と実と――古本説話集四筆の交響――」（『国語彙史の研究　三十二』和泉書院・二〇一二年　所収）以下の論考がある。



この部分を「めでたさは」とよみ、「は」を名詞を受けて主題提示の機能を持つものとすれば、文末は「をはしましたるぞかし」となり、順当な文の流れにならない。注釈書類の口語訳においても、例えば、「すばらしい様子（から考えると）お気立てや振舞いが全般に優雅で洗練されていらっしゃる方であった」（『全訳注』口語訳）のごとく、なにがしかの語句を補わなければ文の筋を通すことができない。「めでたさは〜をはしましたるぞかし」という文の把握に無理があると考えるべきである。

「めでたき（さ）は」を「をはしましたるぞかし」と結ぶ文の把握を改め、「は」で文を切り、「御心さま、御有さま、おほ方いふにらう〳〵しくをはしましたるぞかし」を独立した一文とみる。

「は」は山田孝雄氏以来、「ある特定の対象を明瞭に他の対象と区別して設定し、それが『陳述』（判定統一の作用）を要求する助詞」（『日本語文法大辞典』「は」の項・明治書院・二〇〇一年）と認められ、その性格は、奈良時代以来現代に至るまで変わっていない。ここでは、「めでたき（さ）は」で文を終止し、「は」を詠嘆をこめた終助詞とみることもできる。「は」は、『日本語文法大辞典』に、「係り用法から転じて文末で一文の陳述を強める。連体形につく終助詞とも認められる」とある。

「は」の用例について、『総索引』巻末の「助詞・助動詞索引」によれば、「体言＋は」の用例は、二九六例みられるが（ちなみに、問題の「めでたさは」もこの項に入る）、「形容詞語幹＋接尾辞」の形の名詞に「は」の付く例は本例のみである。

「連体形＋は」の形は二十一例あり、文末に位置する例も三例（五三ウ5・八一オ6・一三二オ1）みられる。また「形容詞連体形＋は」の形は、「うれしきはいかばかりかは」（五三ウ3）「かなしきは〜あはれなりけり」（五六オ5）などの例が見られる。

一方、「ぞかし」の本集用例は四例であり、当該例「をはしましたるぞかし」（五ウ5）の他は、「〜ことぞかし」（五三オ9）・「物ぞかし」（九八オ8）・「申給しぞかし」（五三ウ2）である。「ぞかし」という強調詠嘆の意の連接助詞の用いられる文型は、極めて限定されていることがわかる。

ここは、御禊・三日の作法・出だし車という具体的な事物を提示し、その素晴らしさを詠嘆的に述べているものとみる。五三丁ウ3の例のように、「いかばかりかは」等の語句が省略されているものとみることもできる。また、五三丁ウ5・八一丁オ6・一三二丁オ1の例のように、文末に来る助詞とみることもできる。

以上を勘案し、字形を精査した上で、この部分は「めでたきは。」ととる。この部分の文の流れとしては、五丁オ1〜8「今は昔〜人申伝へたり。」を一まとまりとし、まず、大斎院の一般的な伝承を述べる。次に、五丁オ9〜五丁ウ1「賀茂祭の日〜あさましく。」、五丁ウ1〜2「さて〜とゝのへさせたまはぬかは。」と、詠嘆的な連用形止めや反語「かは」によって、大斎院の後世を願う信仰心の厚さを讃えた上で、現世での栄華も強調する。続けて、その具体

的な事例として、「御禊」「三日の作法」「出だし車」を提示し、その素晴らしさを賞賛する気持ちが終助詞「は」（あるいは文末に「いかばかりかは」などの省略を考える）で強調されている。このように短文をたたみかけるように繋ぎ、続けて五丁ウ４・５「御心様、御有様～ぞかし」で、「御心様」と「御有様」の両面にわたる大斎院の素晴らしさを「ぞかし」で念を押してまとめている。

大斎院を称揚する文の流れとして、きわめて効果的な文構成になっている。なお、『大鏡』における文脈とは異なり、さらに大斎院賛美の気持ちが強く表れている表現とみる。

補説２　字音語における韻尾の表記

１　五丁ウ６　御禊の御ぜむ（御前）

「前」字について、本集の表記事例は以下の十五例である。

【前栽】「せむざい」（八オ４）・「前栽」（一七ウ６）・「前栽」（二五ウ６）

【一前】「一前」（一二七ウ４）　【大姫御前】「おおひめ御前」（三〇ウ６）

【越前】「ゑちぜむのかみ」（一三オ６）・「ゑちぜむのかみ」（三〇オ６）・「越前の守」（三〇オ８）・「ゑちぜむのかみ」（五三ウ10）

「ゑちぜん」（八二オ10）・「越前」（八三オ10）・「ゑちぜんの國」（一〇四ウ10）

【筑前】「ちくぜんのくに」（八〇ウ２）

【前司】「なにがしのぜむじ」（四一ウ５）

【御前】「御禊の御ぜむ」（五ウ６）

全十五例中、仮名書き用例は九例ある。内訳は「む」表記六例、「ん」表記三例である。本集の仮名書き表記は「む」表記が優勢である。

『色葉字類抄』前田本（三巻本）に記載されている、音表記のある十二語について、『類聚名義抄』も含めて、次表のとおり確認した。

【表の見方】「／（斜線）」→欠巻・欠落　「×」→語なし　「△」→音読みなし

語	色葉字類抄 前田本 三巻	色葉字類抄 前田本 二巻	色葉字類抄 黒川本 三巻	類聚名義抄 観智院本	類聚名義抄 図書寮本
前	セン	△	セン	禾是ン	×
前駈	センクウ	×	センクウ	×	×
前妻	センセイ	△	センサイ	×	×
前栽	センサイ	△	センサイ	×	×
前途	セント	△	セント	×	×
最前	サイセン	△	サイセン	×	×
車前草※	／	△	シャセン草	×	×
関前	セキセン	セキセム	セキセン	×	×
筑前	チクセン	△	チクセン	×	×
肥前	ヒセン	△	△	×	×
備前	ヒセン	△	ヒセン	×	×
豊前	／	フセム	フセン	×	×

※「車前草」は「オ（ヲ）ホハコ」と読ませて、オの植物の項目に記載され、シの項目にはない。前田本（三巻本）は、オの項目が欠巻である。

『色葉字類抄』では、前田本（三巻本）の「関前（セキセム）」「豊前（フセム）」以外は、「前」字をすべて「セン」と表記している。『類聚名義抄』観智院本には、「前　禾是ン」のみあり、「セム」の表記事例は図書寮本も含めてなし。また、『韻鏡』（『韻鏡新釋』福永静哉・あそか書林・一九五五年）には「外転第二十三開、歯音、濁、先韻（/ien/）とあり、「前」は「セン」と表記するのが正しい。辞書はほぼ正しく「ン」表記。

（一七）

2　六丁オ1　御たいめむ（対面）

「面」字について、本集の表記事例は、本用例のみである。

前項「前」と同様の方法で確認すると、十四語の記載を見出す。

【表の見方】「／（斜線）」→欠巻・欠落　「×」→語なし　「△」→音読みなし

語	色葉字類抄 前田本 三巻	色葉字類抄 前田本 二巻	色葉字類抄 黒川本 三巻	類聚名義抄 観智院本	類聚名義抄 図書寮本
面	×	×	×	禾メン	メン
面と	／	メム〳〵	メン〳〵	×	×
面謁	／	メンエツ	メンエツ	×	×
面覲	／	メンキン	メンキン	×	×
面談	／	メンダン	メンタン	×	×
面展	／	メンテン	メンテン	×	×
面拜	／	△	メンハン	×	×
面縛	／	メンバク	メンハク	×	△
面目	／	△	メンホク	△	×
面諛	／	×	メンユ	×	×
飼面	シメン	△	シメン	△	×
赭面	シャメン	×	シャメン	×	×
對面	／	×	タイメン	×	×
南面	／	×	ナムメン	×	×

『色葉字類抄』では、前田本（二巻本）の「面と」が「メム」である以外、「面」字はすべて「メン」表記である。

なお、『韻鏡』（前掲書）には、「外転第二十一開、唇音、清濁、線韻」（/iæn/）。平水韻には、（/jen/）。古辞書では「メン」と中国漢字音によっている。日本漢字音でも同じ。

3　六丁オ4　びむなく（便）

①韻母について（「便」字）

「便」字について、本集の表記事例は、次のとおりである。

「ふび（不便）」（九〇オ4）

「ふびむ（不便）」（九三オ9）

「はうべん（方便）」（一〇四ウ3）

本集では、零表記・「む」表記・「ん」表記と三様ある。

前二項「前」「面」と同様の方法で確認すると、次表のとおり、五語の記載を得られる。

【表の見方】「／（斜線）」→欠巻・欠落　「×」→語なし　「△」→音読みなし

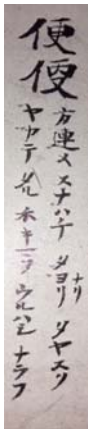
語	色葉字類抄 前田本 三巻	色葉字類抄 前田本 二巻	色葉字類抄 黒川本 三巻	類聚名義抄 観智院本	類聚名義抄 図書寮本
便	ヒン	ヒム	ヒン	禾ベン ヒム	×
便宜	ヒンキ	△	ヒンキ	×	×
穏便	／	ヲンヒム	オンヒン	×	×
不便	／	フヒム	フヒン	×	×
便脚	／	ヒムキヤク	／	×	×

なお、『韻鏡』（前掲書）には「外転第二十一開、唇音、濁、線韻」（/iæn/）とある。

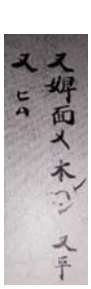
②声母について（ヒム・ビム――清濁の問題――）

「便」字を『韻鏡』で確認すると、「並母」であり、並母は/b/である。『色葉字類抄』では、すべて清音であるが、声点はない。『類聚名義抄』観智院本には、「便 禾ベン ヒム」とあり、「ベン」または「ヒム（ただし、声点はない）」と読む。「便」字は、日本では、古く万葉仮名「べ甲」として用いられた。

『類聚名義抄』観智院本（佛上十八ウ七行）



（同八行）



（天理図書館善本叢書32・八木書店・一九七六年）

『類聚名義抄』の反切上字「婢」は、『韻鏡』（前掲書）には「内転第四開合、唇音、濁」とあり、中国では濁音である。日本では、「ビ甲」の万葉仮名としても用いられた。すなわち、奈良時代には、「婢」は濁音仮名として用いられている。

中国では隋末唐初にかけて、「全濁音の無声化」という音韻変化が起こり、これが「漢音」として日本に入り、日本ではこれを「正音」とし、呉音系統のものは「和音」とされた。呉音系統の和音は「慣用音」として残ったものか。本集の「び（ひ）む」の清濁は不明。

仮名資料における字音語の表記については、そもそも問題があることを考えて、語ごとに、中国の『韻鏡』等の韻書、および日本の古辞書類を参看し、本集の用例を検して、最終的に『古本説話集』における実態を報告する予定である。

補説３　五丁ウ５～７「宇治殿の、兵衛佐にて、御禊の御前せさせたまひたりけるに、いと幼くおはしませば」の解釈について

この部分については、頼通が兵衛佐に任じられたという記録は見られないし、賀茂斎院御禊の前駆をしたということも、「いと幼く」とは何歳ぐらいであるかも不明である。これらの点を、『公卿補任』や『御堂関白記』等に見られる前駆の記事を「道長」の子息を中心に検討すると、以下のごとくである。

『御堂関白記』（『大日本古記録』は長徳四：九九八年から、『全現代語訳・講談社学術文庫』は長徳元：九九五年から始まる）の本格的な記述は、寛弘元年（一〇〇四）からになっている。以後、多岐にわたる記録がなされ、家族の動向についても詳しい。その中から子息の「兵衛佐」ないしは「兵衛権佐」任官と「斎院御禊の前駆」の役割との関係について調べた。その結果をまとめると次のとおりである。

●寛弘三年（一〇〇六）四月十一日に頼宗（道長二男明子腹・十四歳正五位下右兵衛佐）と顕信（道長三男明子腹・十三歳左兵衛佐）が斎院御禊の前駆をしている。

●寛弘五年（一〇〇八）四月十六日に顕信（前出・十五歳）と能信（道長四男明子腹・十四歳）が斎院御禊の前駆をしている。能信は十六歳で「右兵衛権佐」になっているので、この時点では任官していない。

●教通（道長五男倫子腹）は寛弘四年（一〇〇七）十二歳で右兵衛佐に任官しているが、斎院御禊の前駆の記録は見られない。

●「道長」子息以外では寛弘八年（一〇一一）四月十五日に藤原実経（十四歳兵衛佐）が、寛弘九年（長和元：一〇一二）四月二十一日に藤原公成（十四歳右兵衛佐）が斎院御禊の前駆をしている。

また、前駆を務めた年齢に関しては先に拠れば、藤原氏の男子は十三歳（一例）、十四歳（四例）、十五歳（一例）となる。

（一九）

そこで、頼通（道長一男）の場合を考えてみると、頼通は長保五年（一〇〇三）に十二歳で元服している。しかし、『御堂関白記』にはこの年の記録はない。長徳五年（長保元：九九九）や長保二年（一〇〇〇）に頼通に関する記事があることや、他の子息の例からこの年の記録があれば、頼通元服の記事はあって当然と考えられる。兵衛佐任官についても長保六年（寛弘元：一〇〇四）以降のことであればその記事もあって当然で、それがないということは記録がない長保三年（一〇〇一）・長保四年（一〇〇二）・長保五年（一〇〇三）の頃と考えられる。元服以前の任官は不自然なので、元服の年に兵衛佐任官と斎院御禊の前駆が考えられる。「道長」の子息は倫子腹と明子腹があるが、倫子腹の頼通や教通のほうが優遇されたようである。教通は十一歳元服正五下侍従禁色に対して頼通は十二歳元服正五下禁色侍従で、一歳の年齢の差はあるものの、ほぼ同じ扱いである。また、教通は斎院御禊の前駆はしていないが、十二歳で右兵衛佐になっている。とすれば、頼通は十二歳元服の年に兵衛佐に任官し、斎院御禊の前駆をしたと考えることも可能である。

次に、十二歳を「いと幼く」とする点について、前例を検討する。

○「女人年表」（本多伊平編『平安時代補任及び女人綜覧』笠間索引叢刊101・一九九二年所収）に「貞元二年（九七七）四月十六日丙午　賀茂斎院選子内親王従大膳職禊東河入紫野院今日凶会日也中納言為光為前駈（紀略）」とあるが、この時、「中納言為光」は三十六歳である。

○『公卿補任』寛和三年（永延元：九八七）「従三位藤道長廿二」の項に「永観二二一右兵衛権佐四月十四禁色此日為斎王前駈」とあるが、これは、永観二年（九八四）「道長」十九歳の時である。

この二例を考え、斎院御禊の前駆の役は年齢の高い者が務めた時期があったことがわかる。ここから考えると、十二歳という年齢は「いと幼く」と言えるだろう。

以上のように考えると、該当部分は、十二歳で元服した頼通が兵衛佐に任官し、斎院御禊の前駆の役をしたが、その役をやるには若すぎたと解釈できる。もし、この解釈が成立するならば、頼通が十二歳元服の年（長保五：一〇〇三）に、兵衛の佐に任官し賀茂斎院御禊の前駆の役を務めたという事柄は、本集のみが伝えることになる。

なお、「頼通の兵衛佐任官」という問題については、「長保のころのこと」（新潮日本古典集成『大鏡』第三師輔・P135・頭注一二・石川徹校注・二〇〇三年）、「頼通が右近少将に任ぜられた長保五年頃の話と解するならば、その年頼通は十一歳であるから「いとおさなくおはしませば」というのと合致する」（大系本『大鏡』P456・第三巻補注一一）という見方がある。

また、「いと幼くおはしませば」は誰のことかという問題については、大系本『大鏡』には、「いまの関白殿」とあるため、それを「道長」とする説（傍書）などもあるが、前記補注には「大鏡短観抄以下諸注はすべて、『いまの関白殿』を頼通」としている。一方、本集では「宇治殿」となっており、「頼通」のことになる。大斎院は道長より二歳年長であることから、この場合「幼い」のは当然「頼通」である。『全訳注』の口語訳の項には「宇治殿頼通公がまだ兵衛佐で、御禊の行列の前駆をなさった時のこと、大斎院は御幼少だったので」（P51）とあり、「大斎院」が「御幼少だった」としてある。しかし、語釈「本院」の項（P53）では、「この話では頼通は幼いので本院には寄らず、賀茂河原から直接退出したことになっている。」とある。『新大系』でも「幼い」のは「頼通」と解釈してある。幼いのは頼通と解釈すべきである。

（二〇一六年十月十七日・受理）